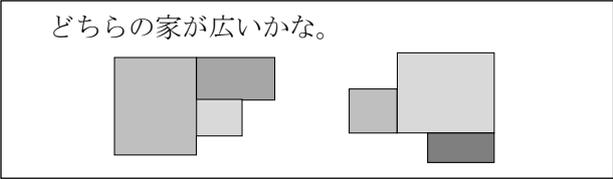


学年	教科等	単元名	日時
第1学年	算数科	大きさをくらべ(2) (第2時)	令和8年2月6日(金)

1 本時の目標

身の回りのものの特徴に着目し、任意単位を用いた広さの比べ方を見いだすことができる。

2 指導過程

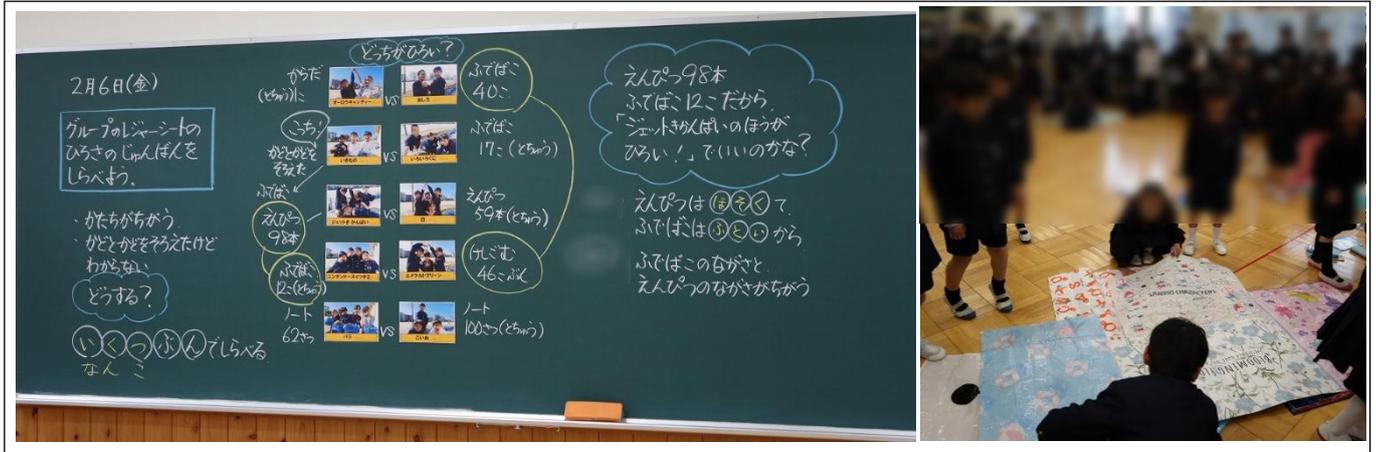
学習活動及び学習内容 (★は評価にかかわるもの)	「自律的に学ぶ」ための手立て
<p>1 学習問題に出会う。</p> <p>○ 広さ比べの問題</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>どちらの家が広いかな。</p>  </div> <p>・「ぼくのレジャーシートは大きいから、ぼくたちの家の方が広いと思うよ。」</p> <p>2 問いをもつ。</p> <p>○ 直接比較</p> <p>・「形が違うから、どっちが広いかわからないな。」</p> <p>○ 問い</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(直接合わせても比べられないときは) どうすれば比べられるのかな。</p> </div> <p>・「何かのいくつ分で考えられないかな。」</p> <p>・「筆箱(ノート)を使ってみよう。」</p> <p>3 問いについて考える。(★)</p> <p>○ 任意単位を用いた比べ方</p> <p>・「□□さんのグループは筆箱33個分で、わたしたちのグループは筆箱41個分だから、わたしたちの方が広いよ。」</p> <p>・「前の学習で△△さんがやっていたように、ノートのいくつ分で調べてみたら、どっちが広いかが分かったよ。」</p> <p>4 問いを解決する。(★)</p> <p>○ 任意単位の大きさの違い</p> <p>・「筆箱33個分と、ノート32冊分だから、『筆箱で調べた方が広い』でいいのかな。」</p> <p>・「筆箱とノートは、大きさが違うね。」</p> <p>○ 共通の任意単位を用いた比べ方</p> <p>・「ノートを使ったら、全部のグループの広さを比べることができたよ。」</p> <p>○ 問いに対する答え</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>同じ大きさのいくつ分で考えると比べることができる。</p> </div> <p>5 本時学習をふりかえる。</p> <p>○ 活用した比べ方</p> <p>・「長さやかさと同じように、広さでも直接合わせて比べる方法を使ったよ。」</p> <p>・「いくつ分の考え方も使えたよ。」</p>	<p>○ 一見するだけでは広さの大きさを判断することが難しい2グループを1組にし、学習問題を提示することで、全てのグループが様々な比べ方を想起して広さを比べようとするようにする。</p> <p>○ 広さを比べることができたグループと、比べることができなかったグループとの解決結果のずれについて、実物を示しながら共有することで、形の違いに着目して問いをもつことができるようにする。</p> <p>○ 学習や生活場面において子どもが働かせた比べ方についての見方・考え方を掲示しておくことで、既習に立ち返り、広さを比べようとするようにする。</p> <p>○ 任意単位を用いて比べたことを、掲示物等を基に長さやかさの学習と関連付けて示すことで、比べ方についての見方・考え方を自覚し、問いを解決する場面で活用しようとするようにする。</p> <p>○ 任意単位の大きさが異なるものを用いた解決結果を共有し、「いくつ分」という視点で比較させることで、任意単位の大きさに着目し、共通の任意単位を用いる必要性に気付くことができるようにする。</p> <p>○ 長さやかさ及び前時の学習に立ち返って考えたり、本時の学習と関連付けたりした言動を価値付けることで、今後の学習や生活場面にも活用しようという意欲をもつことができるようにする。</p>

3 本時の評価規準

身の回りのものの特徴に着目し、任意単位を用いたレジヤースートの広さの比べ方を見いだしている。

(思考・判断・表現)【行動観察・行動分析】

4 板書等



5 指導講評

宮崎県教育庁 義務教育課 元田 正幸 指導主事

- 今年度の算数科の研究は、日常生活にあるものを算数のステージにあげて、子どもの問題意識を基にみんな考えていくというものだった。算数で解決することができる経験は、物事を論理的に考える態度につながっていくため、意義のあることだと考える。
- 授業をつくるうえでは、1単位時間が終わったときに、子どもにどのような資質・能力が身に付いているのか、教師が明確にする必要がある。そのために、評価規準と評価基準を設定し、それらを基に子どもを見取っていくことが大切である。
- 「筆箱とノートは大きさが違う」という、任意単位の大きさに着目した発言をした子どもがいた。このような見方・考え方は、上学年における「C変化と関係」領域だけでなく、他領域の学習にもつながるような発言であり、数学的な見方・考え方を活用するという今年度の算数科としての研究が重要だということを示す発言であった。

6 考察

【研究内容1：数学的な見方・考え方を自覚し、自ら活用するための仕掛け】

広さを比較するための具体物について、子どもが日常的に使用していて、かつ算数科学習以外の学習において、広さを比べるという文脈ではない使い方をしてるものを扱ったことで、問題解決の過程で多くの問いが生まれていた。予め教師が用意した、数値が整った具体物による仮設的な日常ではなく、学級活動のなかで子どもの切実な思いから生まれた本物の日常と算数科学習を結び付けることで、算数科研究部のめざす「自律的に学ぶ」姿が多くの子どもの見られた。このことから、「生活に根差した問い」の過程において、他教科等と関連付けた学習環境づくりを行うことは、数学的な見方・考え方を自覚し、自ら活用するために有効であると考えられる。

一方で、授業のなかで、①「子どもが決めた任意単位では、広さを調べる際に端数が出る」と、②「『広さ』を、具体物の縦と横の長さのみで捉えている子どもがいること」が課題として表出された。これらの課題は、本物の日常を扱ったことで表出された課題である。①の課題を解決するためには、数学的な見方・考え方を活用することを、算数科学習における「探究」と捉えようとして、子どもの多様な問いを整理し、時間をかけて1つ1つ解決していくような単元構成を行うことが重要であると考えられる。②の課題については、特に低学年の段階では、学習環境づくりのみで子どもが乗り越えていくには難しいことも多いため、一人一人の子どもの学びの状況を教師が見取り、必要に応じて個や全体に問い返すなど、教師のファシリテートが必要である。しかしながら、それすらも子ども自身が乗り越えていけるような学習環境づくりについて、これからも変わらず追究していきたい。